

國學院大學學術情報リポジトリ

節用文字の音注研究

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 二戸, 麻砂彦, Nito, Masahiko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00002446

博士（文学）学位論文：『節用文字の音注研究』（要旨）

二戸 麻砂彦（にと まさひこ）

【全体の概要】

日本語史において、漢語および漢字の移入は日本語の文字言語確立という事象も含めて重要な言語的事実と言える。その日本語への馴化と定着に際しては、漢字の表意性を活用する方策として、和訓の適用が図られるとともに、本来は外国語音である漢字の字音を整備しなくてはならなかった。

字音を掲載した文献は多岐にわたるが、当該の『節用文字』は字類抄諸本（世俗および色葉字類抄諸本の総称）の一つとして編纂された古辞書である。鎌倉時代の書写かともいうが、その成立時期は詳らかでない。同書は首尾を欠いた零帖ながら、いわゆる「色葉和名」の基準に基づく和訓語彙の蒐集を目指し、数次にわたる増補改訂を経て、語彙数の増加と字音の付載を実施したと推測される。おそらくは漢文の訓読や作成といった場面で大いに貢献したであろう。同時に、字音を把握する必要も生じたと思われる。字音の把握を試みる場合、当初は中国由来の伝統的な注音方法である反切や同音字注で対応した。中国音韻学の知識があれば、その把握に問題はないが、日本語を母語とする者には敷居が高い。そこで、仮名書きによる音注（「反」表示の有無により二種類あり）が模索された。つまり、より日本語に馴化した字音の把握を必要とする現実があったわけである。

字類抄諸本の中で「節用文字」の研究は最も遅れている。これには理由がある。同書が掲げる漢字見出しに複雑な錯綜を指摘できるからである。また、増補改訂に関わる諸問題も加えなければならない。残念ながら、客観的な分析が乏しいにも関わらず、原撰本あるいは世俗字類抄との類似などが言われてきた。つまり、体系的な研究は皆無に近い。本論文『節用文字の音注研究』では、まず付載された四種類の音注（反切・同音字注・仮名反切・仮名音注）すべてを体系的に整理し、和訓との連関を視野に入れながら一覧表を作成する。その上で、字音把握の実態を分析して行く。

以下、目次に沿って、本論文の要旨を述べる。

【序論】（0-1～0-4 節用文字の概要と音注）

お茶の水図書館蔵（成簀堂文庫旧蔵）『節用文字』は首尾を欠いた零帖ながら世俗字類抄あるいは色葉字類抄の一諸本として、その複製が公刊された。鎌倉時代書写かというが、いまだ詳細な分析がない。いわゆる字類抄諸本中の原撰本系諸本に関わるものであるかどうか、これも不明である。題目には『節用文字』とあるが、その篇部類をみれば、明らかに字類抄諸本と酷似する。「ヌ」篇の地部に始まり、「ム」篇の飲食部までに至る。各篇は十九部をもって基本的な構成をしている。すなわち、天・地・植物・動物・人倫・人跡・人事・飲食・雑物・光彩・方角・員・辞字・重點・疊字（帖字）・諸社・諸寺・國・官である。また、同書は掲出語の錯綜が随所に目立つ。これは初期の編纂段階と増補改訂の過程が複雑で、研究の進展を阻んでいた原因であることも明らかにしておく。

『節用文字』をも含む『世俗字類抄』『色葉字類抄』など字類抄諸本は、常用する基本的な語彙としての和名を蒐集し、対応する漢字見出しのもとに掲出字を選択していく、という編纂の原則を持って成立した。いわゆる「色葉和名」とも言える体裁である。まず和名をもって蒐集をすとなれば、その分類体裁としてイロハ順の検索が採用されたのは自然な成り行きと言える。また、これら当時の辞書は漢文の訓読や作成において活用が期待されたであろうから、和訓だけではなく、掲出字の字音を求める場面もあったはずである。増補改訂が進む中、この要請には反切・同音字注・仮名音注を付載することで対応した。字音注記としては字類抄諸本に限らない一般的な方法と認められる。このことから、字類抄諸本の編纂過程は概ね次の二段階を想定できる。現存する節用文字を見る限り、Bの段階に相当すると認められる。

A いわゆる「色葉和名」の基準に基づく和訓語彙の蒐集

（分類体裁としてイロハ順の検索を採用した初期段階）

B 語彙数の増加と字音の付載

（利便性の向上を目指した増補改訂段階）

【本論／第1篇】（1-1～1-6 節用文字の反切と同音字注）

第1篇では『節用文字』に付載された反切と同音字注を整理して一覧となし、その字音が示す特徴を明らかにする。また、『切韻系韻書』や『玉篇』、あるいは『篆隸万象名義』『新撰字鏡』『類聚名義抄』『法華經音義』『法華經字音点諸本』等と対照することで、出典となった引用書を解明する。現存する『節用文字』は「色葉和名」を目的とした原初形態の原撰本系諸本とは考えにくく、数度の増補改訂を経た状況を示している。その過程で付載されたであろう反切と同音字注について、その分析結果を集約すると、次のようになる。

I 反切十五例は最低限の字音把握を必要とした初期の増補改訂段階において加

えられた可能性が高い。

- Ⅱ 反切の出自としては、切韻系韻書に一致する反切が十一例、玉篇に一致する反切が二例。周禮注が一例、不明が一例である。複数に渡る増補改訂の際、切韻系韻書や玉篇などから、それぞれ別々に付載したか、あるいは複数の出典を含む何らかの文献から孫引きしたか、いずれかを想定する。
- Ⅲ 同音字注は五例と少ないが、掲出字の字音を把握するに際して、留意を要する場合に付載する。その出自は不明である。

【本論／第2篇】(2-1～2-5 節用文字の仮名反切)

第2篇では『節用文字』に付載された仮名反切を整理して一覧となし、その字音が示す特徴を明らかにする。和訓を先んじて示し、後に字音たる仮名反切を添加するというのが、原則的な標準形式であるが、この原則に該当しない変則形式も存在する。また、仮名音注でありながら、なぜ「反」を付加したかという点は編纂過程の問題に連なる。第2篇を纏めると、以下のような結果を得る。

- Ⅳ 仮名反切（「反」表示あり）八九例は、一定の編纂方針のもと、日本語に馴化した字音把握を必要とした増補改訂の早い段階において加えられた可能性が高い。
- Ⅴ 仮名反切と仮名音注（「反」表示なし）とは異なる増補段階において付載されたが、その前後関係は詳らかではない。仮名音注が増補改訂の後段において付加されたと推測する。

【本論／第3篇】(3-1 節用文字付載の仮名音注)

第3篇では『節用文字』に付載された仮名音注を整理して一覧となし、その字音が示す特徴を明らかにする。音注の分析をするに際しては、字類抄編纂の根幹的な方針「色葉和名」を念頭に置きつつ、和訓との連関を視野に入れて進めなければならない。この点を踏まえながら、『節用文字』における仮名音注の所載例を【表1】（省略）に掲げた。文献の分析にとって、最も重要な基礎データの構築と言える。表の構成を示しておく。

番号 → 節用文字に存する仮名音注それぞれに通し番号を付した。

* 熟字の場合、a（第1字）b（第2字）c（第3字）d（第4字）を加えた。

掲出字 → 見出し語。単字および熟字（二字以上）。

* JIS 外漢字は「部首+諧声符」のように表示した。

右注 → 双行または三行による割注の右を右注と略す。

中注 → 三行割注の中央を中注と略す。付注頻度は低い。

左注 → 双行または三行による割注の左を左注と略す。

右傍 → 掲出字の右側を右傍と略す。

左傍 → 掲出字の左側を左傍と略す。

所在 → 篇、部、帖数（現存部分の通し）、表裏、行数の順。

* 篇はイロハ順、部は意義分類を指す。

同書は首尾を欠く零帖ながら、仮名音注は単字と熟字あわせて約 750 に及ぶ見出し語となるため、実際には約 1,200 に及ぶ仮名音注を数える。このように相当数ある仮名音注を、中国語音韻史上における中古漢語が示す中古音（Ancient Chinese）を援用して分類する。音節構造の異なる中国語（IMVF/T）と日本語（CV）とでは、字音の把握が容易ではなことは明白である。

* IMVF/T → 頭子音・介音・主母音・末子音／声調

I	Initial	頭子音	声母
M	Medial	介 音（韻頭）	韻母
V	Principal Vowel	主母音（韻腹）	
F	Final	韻 尾（韻尾）	
T	Tone	声 調	

* CV → 子音・母音

C	Consonant	子音
V	Vowel	母音

【本論／第3篇】（3-2～3-7 仮名音注の韻母別考察）

まずは、中国語と日本語との音節構造の違いを理解するため、韻母別分類を適用し、その結果を【表3】～【表7】（省略）に集約した。仮名音注の字音的特徴を分析するためには、便宜的基準の一つとして、中国語音韻史上における中古漢語が示す中古音（Ancient Chinese）を掲載することが望まれる。そこで、三根谷徹説による中古音と切韻系韻書の所属韻を加えている。

韻母（-MVF）については三根谷説が提示するⅠ・Ⅱ・ⅢA・ⅢB・Ⅳの五韻類に分類する方法を用いる。すなわち「便宜上〈韻腹〉-u-の有無を超えて -a-, -ua- を〈韻頭＋韻腹〉としている韻母を -a 系と呼び、同時に〈韻尾〉を除く部分が -ia-, -iua- である韻母を -ia 系と呼ぶ方法」である。また、介母の有無によって、Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ韻類は〈直音韻類〉、ⅢA・ⅢB 韻類は〈拗音韻類〉とも分類する。

I 韻類	-ɑ 系	-ʌ 系		直音韻類
II 韻類	-a 系	-ɐ 系		
IV 韻類			-e 系	
III B 韻類	-ia 系	-iʌ 系		拗音韻類
III A 韻類	-ia 系	-iɐ 系	-ie 系	

当該の『節用文字』に掲載された仮名音注の字音的な特徴を考察する際には、本邦における仮名音注の実態と比較検討する方法を用いて、先行する『倭名類聚抄』『類聚名義抄』等の辞書類や『大般若経字抄』『金光明最勝王経音義』等の音義書類も参看した。仮名音注すなわち仮名書きによる音注の模索は、より日本語に馴化した字音の把握を必要とする現実に対応した結果と言える。このような漢語（あるいは漢字）の移入と馴化を経て、日本語の中に漢字音は定着していったことがわかる。

韻母別分析の結果を示すため、各韻類ごとに、仮名音注が示す日本漢字音の把握状態を斜体 *italic* のラテン文字（いわゆるローマ字）で集約していく。対応する日本語の音節構造 CV を便宜的に表示する手段である。これによって、基本的な字音の対応を集約することになる。以下、韻類ごとに基本的な対応結果を掲げる。なお、日本語音韻史における音変化などを反映する場合には、括弧で囲む処理をしている。

	-ø	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-ɑ-	-a	-ai	-au -ou	-am (-an)	-ap (-au)	-an (-a)	-at	-aũ (-o)	-ak -aũ (-o)	-oũ	-ok (-o)
-uɑ-	-a -wa	(-e)				-an -wan	-at	-waũ (-oũ)			

	-ø	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-ʌ-		-ai	-ou -o -u	-am (-an)	-ap (-au)	-on		-oũ	-ok	-oũ -uũ	-ok
-uʌ-	-o					-on	-ot				

	-u	-ai -wai				-un			-wak		
--	----	-------------	--	--	--	-----	--	--	------	--	--

	-∅	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-a-	-a	-ai	-au	-am	-ap	-an		-aũ -jaũ -ei	-ak	-aũ	-ak -ok
-ua-	-wa	-wai				-an -wen		-waũ			

	-∅	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-e-	-ai	-ai		-am	-au	-an	-at	-aũ -jaũ	-ak (-aũ) -jak -ek		
-ue-	-ai	-wai							-wak		

	-∅	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-e-		-ei -ai	-eu	-em	-ep (-eu)	-en	-et	-eĩ -jaũ	-ek -jak		
-ue-						-wen	-wet				

	-∅	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-ia-						-an -on -en	-ot	-aũ -jaũ	-ak -jak	-oũ -joũ -wjoũ -uũ	-ok -jok

-iua-		-we				-wen	-ot	-waũ	-wak -wjak		
-------	--	-----	--	--	--	------	-----	------	---------------	--	--

	-ø	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-iʌ-	-o -jo	-i	-u -iu -ju	(-en)	-ou (-au)	-on -in				-uũ -iũ	-ok -uk -ik
-iuʌ-	-u -ju	-wi				-un -on	-ut				

	-ø	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-ia-		<i>-ei</i> <i>-ai</i>	<i>-eu</i> <i>(-jau)</i>	<i>-em</i> <i>(-en)</i> <i>-am</i>	<i>(-eũ)</i>	<i>-en</i> <i>(-ei)</i>	<i>-et</i>	<i>-ei</i> <i>-aũ</i> <i>-jaũ</i>	<i>-ek</i>		
-iua-		<i>-ei</i>				<i>-en</i> <i>-an</i>	<i>-et</i> <i>-at</i>				

[illegible]

	-ø	-i	-u	-m	-p	-n	-t	-ŋ	-k	-uŋ	-uk
-ie-	-i	-i		-im (-in) -om	-ip (-iu)	-in (-im)	-it		-ik		
						-en		-jaũ (-aũ) -eĩ	-ek		
-iue-	-ui -wi	-ui -wi				-un (-uun) (-uwin) (-iwin) (-win)	-ot				

【本論／第3篇】(3-8 仮名音注の声母別考察)

次に、中国語と日本語との音節構造の違いを理解するため、声母別分類を適用し、その結果を【表9】～【表15】（省略）に集約した。仮名音注の字音的特徴を分析するため、便宜的基準の一つとして、中国語音韻史上における中古漢語が示す中古音（Ancient Chinese）を三根谷説によって示した。中古音の示す声母は、p-系, pj-系, t-系, ʈ-系, ts-系, tʂ-系, tsʰ-系, k-系, kj-系に分類される。n-, l- は便宜的に t-系または ʈ-系の後に配置する。

声母の字音的な特徴を分析した結果は、以下の【表16】になる。仮名音注が目指す字音の把握は、すでに日本語に馴化した段階を示しており、いわゆる呉音的特徴と漢音的特徴を区別する状況にはない。また、積極的な濁音表示は限定的であり、日本語の清濁に関わる区分は原則的にはなされてはいない。ただし、いわゆる中国唐代における鼻音声母の非鼻音化（denasalization）を反映する仮名音注の対応においては、日本語の濁音を想定可能な場合がある。

中古音声母 (声母／推定音)			日本漢字音 (ローマ字転写／仮名対応)	
p-系	幫母・幫母 _ㄊ	p-	p-	ハ行
	滂母・滂母 _ㄊ	pʰ-	p-	ハ行
	並母・並母 _ㄊ	b-	p-/b-	ハ行
	明母・明母 _ㄊ	m-	b-/m-	ハ・マ行

pj-系	幫母 _甲	pj-	<i>p-</i>	ハ行
	滂母 _甲	p'j-	当該例なし。	
	並母 _甲	bj-	<i>p-/b-</i>	ハ行
	明母 _甲	mj-	当該例なし。	
t-系	端母	t-	<i>t-</i>	タ行
	透母	t'-	<i>t-</i>	タ行
	定母	d-	<i>t-/d-</i>	タ行
	泥母	n-	<i>n-/d-</i>	ナ行・タ行
	来母	l-	<i>r-</i>	ラ行
t'-系	知母	t'-	<i>t-</i>	タ行
	徹母	t'-	当該例なし。	
	澄母	ɖ-	<i>t-/d-</i>	タ行
	娘母	ɳ-	<i>n-/z-</i>	ナ行・サ行
ts-系	精母	ts-	<i>s-</i>	サ行
	清母	ts'-	<i>s-</i>	サ行
	從母	dz-	<i>s-/z-</i>	サ行
	心母	s-	<i>s-</i>	サ行
	邪母	z-	<i>s-/z-</i>	サ行
tʂ-系	莊母（照二）	tʂ-	<i>s-</i>	サ行
	初母（穿二）	tʂ'-	<i>s-</i>	サ行
	崇母（牀二）	dʂ-	<i>s-/z-</i>	サ行
	生母（審二）	ʂ-	<i>s-</i>	サ行
	俟母（禪二）	ʐ-	当該例なし。	
tʂ'-系	章母（照三）	tʂ'-	<i>s-</i>	サ行
	昌母（穿三）	tʂ'-	<i>s-</i>	サ行
	船母（牀三）	dʂ'-	当該例なし。	
	書母（審三）	ʂ'-	<i>s-</i>	サ行
	常母（禪三）	ʐ'-	<i>s-/z-</i>	サ行
	日母	ɳ'-	<i>n-/z-</i>	ナ行・サ行
	羊母（喻四）	j-	<i>j-</i>	ヤ行
k-系	見母・見母 _乙	k-	<i>k-</i>	カ行
	溪母・溪母 _乙	k'-	<i>k-</i>	カ行

	群母 _乙	g-	k-/g-	カ行
	疑母・疑母 _乙	ŋ-	g-	カ行
	曉母・曉母 _乙	x-	k-	カ行
	匣母	ɣ-	g-/w-	カ行・ワ行
	于母（喻三）	ɣ-	w-	ワ行
	影母・影母 _乙	'-	ø-	ア行・ワ行
kj-系	見母 _甲	kj-	k-	カ行
	溪母 _甲	k'j-	k-	カ行
	群母 _甲	gj-	k-/g-	カ行
	疑母 _甲	ŋj-	g-	カ行
	曉母 _甲	xj-	k-	カ行
	影母 _甲	'j-	ø-	ア行・ワ行

韻母別分類と同じく、本邦における仮名音注の実態と比較検討する方法を用いて、先行する『倭名類聚抄』『類聚名義抄』等の辞書類や『大般若經字抄』『金光明最勝王經音義』等の音義書類も参看した。仮名音注すなわち仮名書きによる音注の模索は、より日本語に馴化した字音の把握を必要とする現実に対応した結果と言える。このような漢語（あるいは漢字）の移入と馴化を経て、日本語の中に漢字音は定着していったことがわかる。

【本論／第3篇】(3-9 仮名音注と仮名反切の機能分担)

字音の把握に際しては、初期の増補改訂段階において反切を基本とした。これは中国語音が示す規範性を重要視した結果と認められる。ただし、掲出字の字音把握に関して留意を必要とする場合（いわゆる呉音あるいは和音として定着している字音の把握などを含む場合）には反切に依らず、同音字注（○反の表示形式）を付加することがあった。それらの方法でも字音の把握が困難と判断した場合、中国語音には依らず、仮名反切が付載された。よって、増補改訂の早い段階における字音の把握は、反切・同音字注・仮名反切を用いたと推測する。

しかし、さらなる利便性の高い要求があったのであろう。『節用文字』のような辞書は、漢文の訓読や作成において活用が期待されたであろうから、和訓の確認とともに、より多くの掲出字の字音を求める場面もあったはずである。それに応えて、字音語の充実という観点から仮名音注の増補に踏み切ったと想定できる。これは増補改訂の後段に当たると考えられる。実用的な字音の把握を可能とするため、より日本語に馴化した仮名のレベルによる標音を目指したわけである。

ここで、『節用文字』における掲出語の錯綜や和訓との関係を考慮し、かつ序論で示した

増補改訂の状況を踏まえて、字音付載の状況を纏めておきたい。

いわゆる「色葉和名」の基準に基づく和訓語彙の蒐集

（分類体裁としてイロハ順の検索を採用した初期段階）

→ すでに反切・同音字注・仮名反切の付載をした可能性も残る

語彙数の増加と字音の付載

（利便性の向上を目指した増補改訂段階）

→ 反切・同音字注・仮名反切の付載（増補改訂の前段）

→ 仮名音注の付載（増補改訂の後段）

さて、第3篇全体を俯瞰すれば、次のようになる。第1篇に示したⅠ～Ⅲ、第2篇のⅣ・Ⅴに続く結論である。

Ⅵ 仮名音注を示す七五五例は、一定の編纂方針のもと、より多くの字音把握を目指す増補改訂が進んだ段階において加えられた可能性が高い。増補改訂の早期に付載された仮名反切とは異なる。

Ⅶ 仮名音注が目指す字音の把握は日本語に馴化した段階を示している。いわゆる呉音的特徴と漢音的特徴を区別する意識はない。中国語音を導入した段階では重層的であったが、やがて渾然と融合した馴化の状況を呈している。

以上要するに、当該の論文が目的とするところは、『節用文字』に付載された音注（反切・同音字注・仮名反切・仮名音注）を、和訓との連関を視野にいれながら整理分析し、日本漢字音の観点から見た特徴を明らかにすることである。

日本語の歴史的変遷において、どのように外国語音である中国語を享受し馴化・定着させてきたかという問題は、広大で重要なテーマである。これまでも、音義書・辞書などを中心として多種多様な文献的研究が行われてきたが、字類抄諸本の一つである『節用文字』については体系的な研究が皆無に近い。その点からも、本論文は日本語史研究に大きな意義を認めることになるであろう。特に、いまだ研究の途上にある日本漢字音史の構築に対して、貢献できるものと確信する。

いわゆる漢字文化圏の中で、発祥である中国語音韻史の解明とともに、それぞれの地域にもたらされた日本漢字音・朝鮮漢字音・越南漢字音（Sino-Japanese, Sino-Korean, Sino-Vietnam など）を究明することは、東アジアにおける歴史的な交流の一端を知る機会となるであろう。

[文字数 7,870 字]

平成 29 年 03 月 21 日